

動詞「漏る」の用法展開をめぐる

抽象表現から具体表現へ

西田 隆 政

はじめに

動詞「漏る」は、現代語においては、物質の一部分が少量ずつどこかわからない隙間からあるべき位置を離れるような移動を表す語として捉えられている。^(注一)ただ、その対象となる物質という点では、下一段動詞の「漏れる」と五段動詞の「漏る」との間に差異が存在する。^(注二)「音」「光」「砂」等は、「漏る」の場合対象とならないのである。^(注三)この小論では、動詞「漏る」の様々な用法の展開がなされたと考えられる、平安朝の仮名散文作品における「漏る」の例を取り上げて、用法展開の契機という側面から検討を試みたい。

別表は、仮名散文二二作品における「漏る」の例を、四段動詞の「漏る」と四段動詞の「漏らす」と下二段動詞「漏る」の三種について、複合動詞をも含めて、その使用数を算出したものである。これを見ると、仮名散文における動詞「漏る」の分布には、顕著なる特徴の存在することが看取される。まず第一に、「源氏物語」以前には使用数自体の少ないことである。第二には、その少数例の多くが和歌の例であることである。第三には、その例が「源氏物語」以降増加し、それも長編の物語において、特にその傾向が著しいことである。

ある。第四には、それを境として、作品中の和歌での例が減少することである。

以上のような概略の傾向を踏まえて、以下、具体例に即して、検討を行うこととする。

一

「源氏物語」以前の九作品、「土佐日記」「竹取物語」「伊勢物語」「大和物語」「宇津保物語」「落窪物語」「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「枕草子」中では、動詞「漏る」は使用例自体が少ないものである。その上、これらの作品での二四例中、和歌での例が一二例と半数を占めている。そして、その用法も、「水」に関するものが一四例と半数以上であり、「月の光」も五例と、和歌での使用傾向に合致するものが大部分なのである。^(注三)次の資料一と資料二には、それぞれ、「水」と「月の光」についての例を挙げた。

【資料一】「などか物のたまはぬ。雨のわりなく侍(り)つれば、やむまではかくてなむといへば、「大路よりもりまさりてなむ、こ、は中々」といらへけり。(大和物語。一七三段)

〔資料二〕廿日月夜ふけていとあかければ、木陰にもりて所々にきしかたぞ見えわたりつる。(蜻蛉日記。天禄元年七月)

その中で、「宇津保物語」「蜻蛉日記」「枕草子」には、傾向の違う例を見ることができる。資料三にあげたのは、「宇津保物語」の「漏らす」の例である。

〔資料三〕すなはちをびをとりて、ばくちを左衛門のぢんにめして、問はせ給へば、ばくちせめられこえて、かのたばかりごとを申。おとぎ、給ひて、心だましひまどひて、よろづのことおぼえ給はず。返返あらじとおぼせど、よる人もなかりしをおぼすに、いふかひもなく、「よし、いはぬ物をしるてもとはじ」との給て、ゆるさせ給て、ゐてまかず。さてばくちめしよせて、きぬ三十びき給。「あめのしたさかさまになるとも、かゝることあらじ、とおもへども、かけても心だましひさはぎて、いといみじければなん、えたしかにもえさだめぬ。このこと人にもらすな」との給て、ゆるさせ給つ。(宇津保物語。ただこそ)資料三では、忠こそその父、橘千蔭が、忠こそその母の死後、故左大臣の北の方を後妻とするのだが、この継母は、忠こそを落とし入れようとして、ばくち打ちを使って、名帯を忠こそが盗んだように仕向ける策謀を行うのである。ただ、ばくち打ちが捕らえられて、ことが露頭してしまう。千蔭は「漏らすな」と口固めをして、彼を許すというのである。

ここでは、他動詞形の「漏らす」で、「たばかりごと」を対象としている。「宇津保物語」では「漏らす」の他二例も「秘密の事態」が対象となっている。しかし、他の四段と下二段の例は、全て和歌の

例であり、水が五例と月の光が一例となっている。

〔蜻蛉日記〕では、一例が傾向の違う例である。資料四が、それである。

〔資料四〕さて、れいのもののおもひは、この月も時々おなじやうなり。廿日のほどに「遠うものする人にとらせん。この餌袋のうちに、袋むすびて」とあれば、むすぶほどに、「いできにたりや。歌を一餌袋いれて給へ。こゝにいとなやましようて、えよむまじ」とあれば、いとをかしうて、「の給へるもの、あるかぎりよみいれてたてまつるをも、もしもりやうせん、異袋を給はまし」とものしつ。(蜻蛉日記。天禄四年五月)

道綱の母が、兼家から頼まれた和歌を贈るに際して、餌袋なら漏れてなくなるかもしれないから他の袋を送って欲しいと言つてやつたという場面である。ここでは、和歌を書き付けた紙が漏れてなくなるの意味で、和歌自体ではなく「紙」を対象としていることとなる。同じような例は、「枕草子」にも見ることができる。資料五には、著名な跋文の例を挙げた。尚、枕草子の他の二例は、「月の光」の漏れる例である。

〔資料五〕この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすと思ひて、つれづれなる里居のほどに書集めたるを、あいなう、人のために便なきいひすぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏出でにけれ。

(枕草子。三〇一段)

清少納言の書いた草子が、隠していたにもかかわらず、世間に漏れ出てしまったというのであるから、「漏る」の対象は草子という事

物ということになる。そして、資料四と五には、ともに漏れては困るものという意識が見出されそうであり、この点は、資料三の秘密の事態にも通じるものである。和歌の「水」に関する例でも、次に挙げた資料六の「伊勢物語」のように、「水も漏らすまいと愛情を誓ったのに」と、その意識は看取されるのである。

〔資料六〕むかし、色好みなりける女、出でていにければ／などてかくあふごかたみになりにつけん水もらさじと結びしものを
(伊勢物語。二八段)

以上のように、「源氏物語」以前の「漏る」は和歌の発想を引き継ぐものが多く、「漏る」の対象も具体物として把握できるものが中心である。抽象的な「秘密のこと」の類を対象とするのは、意図的に対象を「漏らす」場合だけに限定され、「宇津保物語」に三例見出されるのみなのである。

二

続いて、「漏る」のもっとも多用された、「源氏物語」における例を検討する。「源氏物語」での、四段活用の「漏る」、下二段活用の「漏る」、四段活用の「漏らす」の、三種計の使用例は二七例にもなる。そして、その対象となるのも、多くは「宇津保物語」に見たような「秘密の話」や「心中」の類である。何らかの事態を対象とする例が中心であり、事物について「漏る」という例は、殆ど見られなくなるのである。その傾向は、六九例の全てがそうである「漏らす」のみならず、四段動詞の「漏る」でも同様である。以下の資料七から資料九までには、「漏る」の典型例のいくつかを挙げた。

〔資料七〕車などかたへはおくらかし先に立てなどしたれど、なほ類広く見ゆ。車十ばかりぞ袖口物の色あひなども漏りいで見えたる、田舎びずよしありて、斎宮の御下り何ぞやうの折の物見車思し出でらる。(源氏物語。関屋^(注四))

〔資料八〕女はいと物をあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡の程も似げなく人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝覚め寝覚め、思ししをる事いと様々なり。(源氏物語。夕顔)

〔資料九〕例の明暮こなたにのみおはして、御遊びもやうやうをかきころなれば、源氏の君も、いとまなく召しまつはしつ、御琴笛など、様々に仕うまつらせ給ふ。いみじうつみ給へど、忍びがたき気色の漏りいづる折々、宮もさすがなる事どもを多く思しつづけらる。(源氏物語。若紫)

資料七は、空蟬の一行が関山にて、源氏の物語での一行と行き合う場面である。空蟬方女房達の出だし衣の袖口や襲の色合いが常陸からの上京にもかかわらず田舎びていないのを見て、源氏は都人の斎宮の御下りを見る物見車のことを思い出されるという例である。ただ、「袖口」を対象とする例は少なく、四段動詞「漏る」五五例の中で六例しか存在せず、他の事物についての例も、「水」が三例、「月の光」が一例、「人の姿」一例を数えるのみである。

資料八は、六条御息所の性質を描写している部分である。源氏との仲が「似つかわしくないもの」と世間の人々の漏れ聞いて噂になったらと、夜離れの続く中、一層思い悩み悲しむことも多い状態である。「漏る」のは、源氏との「秘めた関係」となる。これは「宇津

保物語」の資料三に通じる例である。

資料九は、宮中での管弦の遊びで、源氏は素晴らしい演奏をしつつも、慎んでも忍びがたい藤壺への思慕の様子が自然漏れ出てしまふという例である。「漏る」の対象は「気色」であるが、「秘密のもの」という前提では資料八と同様である。「源氏物語」での「漏る」の例は、これら「秘密」とされるべきものがその大部分を占めている。そして、これらの「秘密」の「漏れる」ことが、物語中においては、展開上重要な意味を持つものであり、その点も「漏る」の多用に繋がったと考えられる。さらに、この傾向は、「源氏物語」よりの影響を受けているとされる、後期の長編物語にも引き継がれるものなのである。

ただ、ここで、「漏る」の用法の展開として着目されるのは、現代語では「漏れる」の場合に特に多用される、「音」自体が「漏る」となる例が存在しないことである。「水」や「光」については、「漏る」とする例があるにもかかわらず、「音」の例の存在しないのは、どのように考えるべきなのであろうか。以下、さらに、その点について見ていきたい。

三

「源氏物語」中で、「音」に近似するものを「漏る」の対象としていると考えられる例としては、次の資料一〇に挙げる、浮舟の巻の例がある。

〔資料一〇〕「心地こそいとあしけれ。いかならむとするにかと心細くなむある。まろは、いみじくあはれと見おい奉るとも、

御有様はいとく変りなむかし、人の本意は必ずかなふなれば」と宣ふ。けしからぬことをもまめやかにさへ宣ふかな、と思ひて、「かう聞きにくき事の漏り聞こえたれば、いかやうに聞えなしたるにかと、人も思ひ寄り給はむこそあさましかれ、心憂き身にはすすろなることもいと苦しく」とて――以下略――

（源氏物語。浮舟）

匂宮が二条院にて中君と語り合う場面であるが、匂宮が「あなたは、いづれ薫と仲良くなられるのだろう。本当にそう思うことは必ずかなうのだから」と、皮肉を言ったのに対して、中君は「そのような人聞きの悪い言葉が薫に漏れ聞こえたら、どのように思われることでしょうか」と反論している。ここでは、「漏る」の対象としては、匂宮のその会話文自体を指していると考えられる。勿論、これは夫婦の間だけでの会話故に、「秘密の話」となるのであるが、それよりも、「かう聞きにくき事」と直前の会話文を受けていることが注目される。単なる「秘密の話」ではなくて、より明瞭な形をもった「会話」ひいては「言葉」というものが対象となったのである。

〔資料一一〕御簾の内のけはひ、そこらつどひ給ふ人の衣の音なひ、しめやかに振舞ひなして、うちみじろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞ゆる気色、ことはりにいみじと聞き給ふ。

（源氏物語。賢木）

資料一一は、桐壺帝の崩御の後、藤壺のもとを源氏が訪ねる場面である。御簾の内の女房達の悲しげな様子が漏れ聞こえて来る「気色」もと続いているが、この「気色」の中には、直前の「衣の音なひ」や「うち身じろき」の「音」も含まれていると考えられる。

〔資料一二〕箏の御琴は、物の隙々に、心もとなく漏りいづるものの音がらにて、うつくしげになまめかしくのみ聞ゆ。

（源氏物語。若菜上）

資料一二は、六条院での女楽での明石の女御の演奏に対しての批評の部分である。箏の御琴は、物の隙間から漏れ出てくるような音色であるとの批評である。ただ、この例では「音」自体が漏れ出て聞こえてくると言っているのではない。「漏りいづる」ような音色の様子であるとの比喩的な用法というべきものである。

〔資料一三〕夜明け方近く、かたみにうち解け給ふことなく、そむきそむきに嘆き明かして、朝霧の晴間も待たず、例の文をぞ急ぎ書き給ふ。いと心づきなしと思せどありしやうにもばい給はず。いとこまやかに書いて、うち置きて、うそぶき給ふ。忍び給へど、漏りて聞きつけらる。／＼いつとかは驚かすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひし一言／＼うへより落つる」とや書き給へらむ。（源氏物語。夕霧）

資料一三は、雲居雁の住む屋敷である三条殿での一場面である。夕霧は、故柏木の妻であった落葉の宮に心引かれる故に、雲居雁とはうち解けることもできない。そして、彼女が側にいるにもかかわらず、宮への手紙を書こうとする。それを「うそぶく」のを雲居雁は聞きつける。その一連の状況を「漏りて聞きつけらる」と表現しているのである。夕霧の「うそぶく声」自体が漏れてとも考えられるが、「源氏物語」中の例の傾向からするならば、「秘密の手紙」であるからこそ「漏る」を使ったとも考えられる。また、形の上でも、「漏りて」と一度切れた上で「聞きつけられる」と続くのである

から、この「漏る」も先の資料一二と同様、「漏れるようにして」と比喩的な表現と考える可能性も存するのではなからうか。^{（注五）}

ところで、仮名文学における、「音」を「漏る」の対象とする確実な例は、今少し、時代を下らねばならない。「栄花物語」の資料一四の例である。

〔資料一四〕今しばしだにのどかに見奉らせ給ふべきを、御心にもあらずいみじうおぼし惑はせ給ふ。御声も漏り聞えつつ、
いといみじ。（栄花物語。きるはわびしとなげく女房）

ここまで見てきた「源氏物語」の例とは異なり、この「栄花物語」の例では、明らかに「音」自体が「漏る」の対象となっていると考えられる。後一条院の崩御の折、上東門院彰子と中宮威子とは、死の穢れから逃れるために、衣に包みこまれて他の殿舎に下がっている。そのときの、二人の泣き声が衣の中より漏れ聞こえてくるといふのであるから、この場合、対象は今まさに聞こえている「泣き声」と見るべきである。資料一三では、「秘密」にすべき手紙の一節というのが、「漏る」の使われた条件と考えられるのに対して、資料一四では、「泣き声」という「音声」そのものが「漏る」と言われるようになったと考えられるのである。

しかし、ここで注目されるべきは、「源氏物語」において既に「音」が「漏る」とする例の萌芽が現れていることである。「源氏物語」での「漏る」の例の大部分は「秘密の話」や「気配」といったものであるにしろ、それに繋がるような形で「音」と「漏る」との関連性を窺わせる例がいくつか見出されるのである。

それを考えるために、今一度、「漏る」の用法について、整理して

考えてみたい。まず「水」が「漏る」例では、何らかの場所から隙間を通って漏れ出す場合が中心である。資料一、六などがその例である。また、「水」の場合には、漏れては困るという意識も見出されそうである。次に、資料二の「月の光」では、どこかの隙間から漏れ入って来るものとして表されている。これは、隙間からという点で「水」と共通性を考えることが可能である。

一方、資料三以下の「秘密」の例では、隠していたことが「水」と同じように何かの隙間から出ていくものであり、派生関係を想定しえそうである。さらに、ともに当事者にとっては漏れては困るものという点でも共通性を見出しうる。資料八では、六条御息所にとって源氏との関係が「漏れ広がって」しまうのは決して好ましいことではなかった。「秘密の気配」でもそれは同様で、資料九のように、女性にとって男性側から気配を窺われるのは恥ずかしいことであった。勿論、隙間から漏れ出るという点でも、資料一一のように御簾の内より漏れ出て来るわけである。

これらの中で、「音」への用法の展開が想定されるのは、「秘密」に關する例であろう。資料八の「秘密の關係」等の例だけでなく、資料一〇のように「秘密にすべき言葉」と理解できる例も存在するのである。さらに、資料一三では、夕霧が「秘密の手紙」の一節をうそぶく「声」について「漏る」とするわけである。とすると、「秘密の事態」から「秘密の言葉」ひいては「秘密の声」のような例が出てきたと考えることが可能なのではなからうか。即ち、「事態」から「言葉」なり「声」へと展開したと思量するのである。

そして、この一連として捉えた、「秘密」に關する例では、いずれ

も漏れては困るものという共通性を見ることが可能である。比喩的な用法と考えられる資料一二以外は、全て当事者にとっては漏れることは困ることなのである。この点については、次の資料一五が注目される例である。

〔資料一五〕思ひあがれる気色に聞きおき給へる娘なれば、ゆかしくて、耳とどめ給へるに、この西面にぞ人の気配する。衣の音なひはらはらとして、若き声どもにくからず。さすがに忍びて、笑ひなどする気配、ことさらびたり。格子上げたりけれど、守、心なしと、むつかりておろしつれば、火灯したる透影、障子の上より漏りたるにやをら寄り給ひて、見ゆやとおぼせど隙もなければ、しばし聞き給ふに、この近き母屋につどひゐたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞き給へば、わが御うへなるべし。「いといたうまめだちて、まだきに、やむことなきよすが、定まり給へるこそ、さうさうしかめれ。されど、さるべき限には、よくこそ隠れありきたまふなれ」など言ふにもおぼすことのみ心にかかり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞き付けたらむ時、などおぼえ給ふ。(源氏物語。帚木)

資料一五は、雨夜の品定めの後、源氏一行が方違えのために左大臣邸から紀伊守の屋敷に赴いての場面である。源氏は、空蟬への興味の故に、女房達の戯れ話にも耳が欬てられてしまう。ただ、これらの「衣の音なひ」や「うちささめき言ふことども」については「漏る」とはならない。たまたま聞き付けたことという扱いなのである。しかし、後半の「もし藤壺との關係のことを言い漏らしているのを

聞き付けたら」と、話が非常に重要な意味を持つ漏れてはならない事態に関してとなると、「漏らす」という形で表現されるのである。この例は、軽い内緒話と重要な秘密の話という二つのことが対比的に表されている点でも、注意されるところである。

まとめ

以上、検討してきたところからするならば、「漏る」という言葉においては、「秘密の事態」や「密事」が漏れるとする例の方が、「音」自体の漏れる例よりも、早く現れたこととなる。「漏る」の基本的な意味を「何かの隙間から漏れ出す」とすると、これは説明可能であろう。「音」自体ではその条件に合わないが、「秘密」ならばそれに適合して説明することができるのである。

そして、「音」についての「漏る」という例が現れたのは、「秘密の事態」から「秘密の会話」さらには「秘密の手紙」というような、漏れては困るものという一連の流れの中で、それに関連しての「音」が「漏る」であると考えられるのである。逆に言えば、漏れることが悪い方向に作用しないような場合には、資料一五の前半の話のように「漏る」とは言わなかったのである。

用法の展開という点においては、その言葉の保持する様々な属性が契機となると考えられる。動詞「漏る」の場合、隙間というものが「水」から「光」への例に繋がり、「漏れては困る」という点が「秘密」からひいては「音」の例に繋がったと想定されるであろう。言葉の用法とは、現象的には、ある言葉が他のいかなる言葉と共に起すのかという捉え方が可能である。^(注六)しかし、この「漏る」の例で

試みたように、事例を分析する中で、その展開に何らかの方向が考えられるのである。「漏る」の場合、「音」にマイナスの要素が付加するのは、「ヘッドホンの音が漏れる」のように現代まで連なるものなのである。

尚、以上のことが言えるとするならば、「音」に関してでは、抽象的な用法から具体的な用法が出てきたということにもなる。^(注七)これは、普通言われる、言葉の意味・用法の流れとは逆の方向である。日本語におけるそのような例としては、佐竹昭広氏が顔料の「ある」「く^(注八)り」「あけ」等がそれぞれ形容詞から派生したものであることを述べられている。ただ、日本語の動詞においては、「車をとどむ」と「心をとどむ」のように一つ言葉で具体的なものについても抽象的なこと^(注九)についても表現可能である。今後、動詞の用法を検討する中で、さらにこれらの問題についても考えていきたい。

(注一) 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進「ことばの意味1 辞書に書いていないこと」(平凡社。昭和五一年九月)。

(注二) 小泉保・船城道雄・本田品治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語基本動詞用法辞典』(大修館。平成元年三月)は、「漏る」の文型として「音が〔物・所〕から漏る」を入れている。

(注三) 西田隆政「和歌解釈と語義展開―動詞「漏る」をめぐる―」(『解釈』第三五巻第八号。平成元年八月)。

(注四) 池田龜鑑『源氏物語大成』校異篇(中央公論社。昭和二八年六月)による。適宜漢字を宛て、濁点と句読点を施した。

以下の引用も同様である。

(注五)『源氏物語大成』校異篇によれば、諸本「漏りて」とある。

(注六)柴田武『語彙論の方法』(三省堂。昭和六三年七月)。

(注七)池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店。昭和五六年七月)。

(注八)佐竹昭広『古代日本語における色名の性格』(『国語国文』第二四卷第六号。昭和三〇年六月)、『万葉集抜書』(岩波書店。昭和五五年五月)所収)。

(注九)中田祝夫博士の第五十六回訓点語学会研究発表会(昭和六二年五月。発表題目は「漢文訓読と中古国語」)「かうぶる」と「かづく」をめぐって」でのご教示による。

〔後記〕本稿は、平成元年八月の解釈学会全国大会研究発表会において、口頭発表した際の草稿を修正加筆して成稿したものである。席上、また発表後、ご教示を賜った、小久保崇明教授、河内章氏、松田豊子氏に、厚く御礼申しあげます。

〔凡例〕

一 原則として、『岩波日本古典文学大系』によった。以下の作品は、それぞれ下記本文による。『宇津保物語』(『宇津保物語本文と索引』本文編)、『蜻蛉日記』(『かげろふ日記総索引』)、『枕草子』(『枕草子総索引』)、『源氏物語』(『源氏物語大成』校異篇)、『源氏物語』(『源氏物語校本及び総索引』)、『多武峰少将物語』(『多武峰少将物語本文及び総索引』)、『讃岐典侍日記』(『小学館日本古典文学全集』)。

二 「源氏物語」の資料は、大成校異篇の本文の仮名遣いを改め、さらに、適宜漢字を宛て、句読を施した。

三 それ以外の作品の資料は、テキストの本文をそのまま引用した。

四 「漏る」「漏らす」「漏る」(下二段)の数値は、複合動詞を含んでのものである。

五 三種計は、右の三種の動詞を合計した数値を示している。尚、和歌はこの数値に含まれている。大和物語では、六例中の三例が和歌であることを示している。

別表

動詞	作品名	漏る一四段	漏らす一四段	漏る一四段	三種計	うち和歌
土佐日記	0	0	0	0	0	0
竹取物語	0	0	0	0	0	0
伊勢物語	1	1	0	1	1	0
大和物語	3	6	0	0	6	0
宇津保物語	6	9	1	3	5	0
落窪物語	0	0	0	0	0	0
蜻蛉日記	2	5	0	0	5	0
和泉式部日記	0	0	0	0	0	0
枕草子	0	3	0	0	3	0
源氏物語	2	127	3	69	55	0
紫式部日記	0	1	0	1	0	0
更級日記	0	1	0	0	1	0
浜松中納言物語	0	5	1	1	3	0
夜の寝覚	2	29	1	10	18	0
狭衣物語	5	28	1	9	18	0
堤中納言物語	0	0	0	0	0	0
平中物語	1	1	0	0	1	0
源氏物語	0	0	0	0	0	0
多武峰少将物語	1	1	0	0	1	0
讃岐典侍日記	0	3	2	0	1	0
栄花物語	0	24	0	3	21	0
大鏡	0	0	0	0	0	0
合計	23	244	9	97	138	0